

## 同窓会会報の題字のことなど

上原 昇 (2組)

図書館から貸出を受けた本『満洲国グランドホテル』(平山周吉著、芸術新聞社から2022年4月刊)を読み出して、ふと、ある箇所が目が止まった。

石橋湛山が満洲視察した章で登場する「稲垣征夫」という名前に何故か?見覚えがあったからだ。本の中では、満洲国開拓総局長とあるから、相当古い時代の人である。

関東同窓会会報の題字『うえだ』は、下に故稲垣征夫氏(14期)に依るとある。【写真】幸い、同窓会HPには昔からの全会報が収録されているので、さっそく検索してみた。すると、昭和46年6月15日に発行された会報5号に、直前に亡くなった稲垣征夫氏の追悼記事が大きく掲載されていた(<https://uedakant.sakura.ne.jp/kaiho/1-5go.pdf>)。

それを見ると、本に出てくる稲垣氏と同一人物であることが分かった。

プロフィールには、明治30年(1897年)生、小諸市出身、同窓14期、東京帝大(法)卒、商工省入省、満洲国へ渡る・・・とあり、関東同窓会(当時は関東支部)では第3代会長(当時は支部長)を務め、昭和46年(1971年)に74歳で亡くなっている。

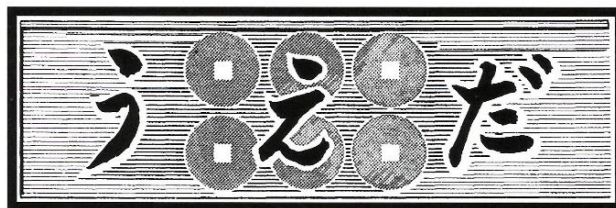
筆者(上原)は稲垣氏と会ったこともないが、記憶に残っていたのは、以下の場面に遭遇したからである。時期は定かではないが、およそ20年以上前であったか。関東同窓会の幹事会で、ある若手会員が「同窓会の会報の題字は古臭いから、一新して現代風にしたら」といった意見を述べたところ、年配の会員が血相を変えて、「この題字は誰が揮毫したのか知っているのか。会報創刊号が発行された昭和44年当時の稲垣支部長の書いたもので、失礼なことを言うものではない」と反論して、意見は即却下された。筆者も稲垣氏がどれだけ偉い人だったかは知らなかったが、その名前だけは頭の片隅に残っていたのである。従って、題字は創刊以来、今日まで変わっていない。

今回改めて、昔の会報を紐解き、稲垣大先輩の一端を知ることとなった。関心のある人は、会報5号を覗いてみることをお勧めしたい。

500ページを超える大冊の上記の本は、1週間後、やっと読み終えた。

### 【関東同窓会会報の題字】

(2023年2月20日記)



第105号

2023年

(令和5年)

1月1日

(日曜日)

上田高等学校関東同窓会会報 題字は故稲垣征夫氏(14期)